

令和5年度入学者選抜試験

学校推薦型選抜問題

小論文 (120分)

(保健福祉学部)

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、5ページあります。
- 3 解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚あります。解答用紙には解答欄以外に受験番号欄と氏名欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入ください。
ただし、得点欄と整理番号欄は記入してはいけません。
なお、解答は最初のひとマスを開けず、改行せずに続けて記入ください。
また、行末以外は句読点も1文字分として当てなさい。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 下書き用紙は、下書き等に利用してもよろしい。
- 7 試験終了後、下書き用紙および問題冊子は持ち帰りなさい。

問題 1 次の文章は、『ケアの倫理と共感』という著書の一部です。この文章を読んで、設問 1 および設問 2 に答えなさい。

‘empathy’ という言葉は、二〇世紀初頭、ドイツ語の ‘*Einfühlung*’ の英訳語として初めて使われるようになるまで、英語には存在していなかった。だからといって、共感という考えや発想が、それ以前は私たちの文化には存在していなかったということになるわけではない。（中略）つまり共感においては、相手が苦悩するのを見たとき、私たち自身の中に、相手を感じている感情が（非自発的に）呼び起こされるのである。それは、あたかも相手の痛みが私たちに侵入してくるかのようになるのである。そして、ヒュームは、これに関連して、ある人が感じていることと、それを他の者が感じとるようになること、この二者の間にある情動伝染について述べている。しかしながら他方で、私たちは痛みを感じている人を哀れに思うこと、気の毒だと思いうこともできるし、また、相手が回復することを強く願うこともできる。これは、つまるところ、相手に同情（*sympathy*）していることを意味する。だが同情は、相手の痛みを感じとらなくても〔すなわち共感なしに〕可能である。しかし、共感なしに同情することがどのように可能かを示す、さらに適切な事例となるのは、次のような状況だろう。すなわち、屈辱を受けたと感じている人を気の毒に思っている、だからといってそういった屈辱感が伝わり自分自身に生じているわけでは決してない。

（中略）

ホフマンの議論によれば、個人の共感はいくつかの段階を経て発達するが、その発達の初期段階では、共感と「向社会的」、利他的、あるいは道徳的な動機との結びつきはまだはっきりしておらず、形成の途上にある。幼児は——新生児でさえも——近くにいる他の子どもの苦痛や泣き声に遭遇すれば、苦痛を感じる事ができるし、自分も泣き出すことになる。この啼泣^{ていきゅう}はある種の模倣を通して起こる、一種の「伝染」のようなものである。しかし子どもは、概念的／言語的な技能を身につけ、個人としての経験を豊かに蓄えていくし、また他者が生きていく現実に対する感覚をより十全なものにしていく。そうなるにつれて、問題になっている状況や経験が、直に現前^{じか}しておらず、それに関して単に間接的に聞いたり、覚えていたり、また本で読んだりしかしていなくても、言葉に媒介される形で共感が自ずと呼び覚まされるようになる。さ

らに、(普通の)子どもは自ら意識的に他者の観点を採用することができるようになり、その人たちの観点から物事を見たり、感じたりできるようになる。これらの後続する発達段階において出現する共感（また特に後者、移入的共感）は、他者への同一化を含むものとしてときに語られることもある。しかし、ホフマンらの主張によれば、ここでの同一化は、他者との完全な融合や他者への完全な溶解ではない。つまり、真正な共感や成熟した共感（fully developed empathy）においては、共感する側の人間は、自分が相手とは異なる人間である、という感覚を維持しているのである。

したがって、共感的な同一化によって、共感する側は自らのアイデンティティの喪失を味わうわけではない。ホフマンによれば、共感的な同一化が含んでいるのは、共感する人物が、自分（の状況）にではなく、相手の状況に適合した仕方で、感情や思考を体験することなのである。そして、個人の認知的把握が洗練され一般的な経験が増大するにつれて、見事あるいは精緻な共感の「妙技」がますますできるようになる。かくして、一定の発達段階に至ると、共感とは表面的な外観の背後にまで到達できるほどになる。（中略）一般に、私たちは世の中で生起する行為や出来事が将来どのような結果をもたらす（またもたらさう）のかを、より意識することができるようになるにつれて、その人が実際に感じていることに対してのみならず、私たちの行為や何らかの出来事の結果、その人が感じるようになることや感じるであろうことに対しても、共感できるようになる。

（出典：マイケル・スロート著 早川正祐・松田一郎訳『ケアの倫理と共感』より抜粋、勁草書房 2021年）

設問 1 共感と同情の違いについて、筆者の言葉を参考にしながら、100 字以内で説明しなさい。（40 点）

設問 2 下線部について、筆者のいう共感を獲得するためにどのようなことが必要か、具体的な例を提示して、あなたの考えを 300 字以内で記述しなさい。（60 点）

注：栄養学科における配点は上記×0.25 とする。

問題 2 次の文章は、『3000 万語の格差——赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話しかけ』という著書の一部です。この文章を読んで、設問 1 および設問 2 に答えなさい。

私たちは皆、多様な側面でさまざまな可能性を持って生まれてきます。けれども、その可能性が十分に発揮されるには、努力が必要です。花のタネが、バラやペチュニアやアジサイになる可能性を持っていても、それぞれの花の最終的な美しさと強さは、育つ途中の世話によります。タネを暗い地下室にまいて、水をほとんどあげないでみてください。そうすればわかるでしょう。

脳も同じです。脳の発達に関する科学、たとえば、脳の最適な発達が環境に依存するという点をすでに書いてきました。3000 万語イニシアティブのプログラムはこうした科学の結晶です。プログラムで使っている、きれいなアニメーションやビデオも科学に基づいています。アニメーションでは、初期の最適な言葉環境について保護者にポイントを教えるだけではありません。子どもの知性は生まれた時に決まっているのではなく、知性が十分に発達するためには、保護者のつくる言葉環境がとても大切だと理解できるようになっています。

(中略)

幼い時期の言葉環境の豊かさが乳幼児の脳の発達にとってどれほど重要かは、わかっています。このプログラムにおける大切な問いは、豊かな言葉環境の利益を子どもたちが最大限に受けられるよう、私たちは保護者の環境づくりをどう支援できるか、でした。

結果が、3000 万語イニシアティブの核となる「3つのT」、つまり「チューン・イン Tune In」「トーク・モア Talk More」「テイク・ターンズ Take Turns」です。言葉を耳にすることが脳発達に及ぼす効果について科学は明らかにしていますが、科学自体の内容は複雑です。そこで、乳幼児の脳発達にとって最適な環境をつくるため、科学をわかりやすく使いやすいプログラムにしたのが「3つのT」です。「3つのT」は日常生活の中で自然に、保護者と子どものやりとりを豊かにします。

「プラスの言葉環境をつくる」とは、単に語彙を増やすだけではないという点はここで強調すべきでしょう。「プラスの言葉環境」とは、あたたかく、育てていく関

係の表れです。たくさんは話さないけれども愛情にあふれた保護者ではダメだ、と言っているわけではありません。でも、言葉は、今、やりとりしていることに対して興味を持っていると誰かが伝えてくれる方法です。そして、言葉は、真摯かつ前向きに誰かが私たちとつながりを持ちたいと思っている気持ちを表す方法です。これは確かです。

豊かな言葉環境をつくることは、ただでさえ忙しい生活の中に特別な時間をひねり出すという話ではありません。「3つのT」は、どんなに平凡な作業であっても、日常の活動のごく自然な一部になるようデザインされています。親や保護者が言葉を足すことで、ベッドを整えたり、リンゴの皮をむいたり、床を掃除したりといった日常を脳づくりの一部に変えられます。こうした言葉は保護者と子どもの関係を豊かにする大切な役割を果たすでしょうし、同時に子どもの脳も豊かにするのです。

(中略)

チューン・イン^[訳]は、「3つのT」の中でもっとも繊細です。乳児や幼児が集中している対象に保護者が気づき、適切な場合にはその対象について子どもと一緒に話すという意識的な行動です。子どもが集中していることに保護者も集中する行動、とも言えます。おとなの言葉をまだ理解できなくても、あるいは、子どもの意識があちらからこちらへと次々に変わっても、子どもの注意が向いているものやできごとに保護者がついていき、子どもの働きかけに対して反応を返すことがチューン・インです。チューン・インは、脳を育てるために保護者の話し言葉の力を使う最初の一步であり、保護者がチューン・インしていないのであれば、後の2つのT（トーク・モアとテイク・ターンズ）には意味がありません。

例を挙げてみましょう。

母親であれ父親であれ、愛情にあふれて子ども思いの保護者が床に座り、子どもが好きな絵本を持っています。ジョリー・ロジャー・ブラッドフィールド Jolly Roger Bradfield の『巨人と言っても大きさが違う Giants Come in Different Sizes』ではどうでしょう？ 私が好きな絵本です。親は子どもの横の床をパタパタとたたき、微笑みます。子どもにとっては、リラックスしてお話を聞こう、というサインです。でも、子どもは反応しません。ちらかした古い積み木で塔をつくり続けています。親はカーペットをもう一度たたき、「おいで。ここに座って。いいお話だよ。お父さん（お母さん）が読んであげるよ」と言います。

[訳] チューン・イン Tune in は、ラジオやテレビの周波数を合わせることでもある。楽器のチューニング tuning (調律) も同じ動詞。

(出典：ダナ・サスキンド著 掛札逸美訳 高山静子解説『3000万語の格差——赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話しかけ』より抜粋、明石書店 2018年)

※文章の一部を、ゴシック体から明朝体に変更している。

設問 1 乳幼児の言葉環境の豊かさについて、本文の内容を踏まえ、200字以内で説明しなさい。(40点)

設問 2 下線部の例について、「チューン・イン」の観点から、あなたの考えを300字以内で記述しなさい。(60点)

注：栄養学科における配点は上記×0.25とする。